

# パトナーに於ける伝・アーザル・カイヴァーン廟—伝説と実像—

## The so-called Mausoleum of Azar Kayvan in Patna: Legend and Facts

青木 健

文化・芸術研究センター

Takeshi AOKI

Art and Culture Research Center

序論では、2010年以降のアーザル・カイヴァーン学派研究の成果を概観する。新出ペルシア語写本の校訂、19世紀の「第2次アーザル・カイヴァーン学派」の存在、「伝・アーザル・カイヴァーン廟」の発見などである。現在の資料状況では、アーザル・カイヴァーン学派の全体像を描出するには至っていないが、基礎資料は拡充されつつある。本稿では、それらのうち、「伝・アーザル・カイヴァーン廟」の調査について報告する。

第1章では、「伝・アーザル・カイヴァーン廟」が存在するインド・ビハール州パトナーの歴史的・地理的概観を試みた。現在の市街地よりも大幅に東へ寄った地点に近世パトナーがあったこと、雨季と乾季の経済活動、イラン系名士の集住地、スーフィー教団の拠点、市内に存在する仏教遺跡などが確認された。アーザル・カイヴァーン在世当時には、スワラワルディー教団とカーディリー教団が、パトナー郊外でハーンカーを造営していた。

第2章では、先行研究のパトナー調査を概観した。チャハールデヒー氏は3回パトナーを調査したとするが、「伝・アーザル・カイヴァーン廟」の正確な位置を示しておらず、調査日時・周辺状況も不明瞭のままである。

第3章では、2016年2～3月の筆者によるパトナー調査の詳細と、そこから得られた結論が述べられる。現地のハーンカーに於ける伝承では、カイヴァーン・シェクーフ地区はイラン系の知識人やスーフィー廟の集まる地点であり、その一角に嘗てアーザル・カイヴァーン廟が存在していたとされる。しかし、印パ分離独立後にこの地区の住民の多くがパキスタンへ移住し、アーザル・カイヴァーン廟は取り壊されてヒンドゥー寺院の建設が試みられた。それが完成しておらず、現在は未完成状態のヒンドゥー寺院が「伝・アーザル・カイヴァーン廟」の跡地に建っている。

What I have done in this small article is to provide the basic outline and information of the so-called mausoleum of Āzar Kayvān (1533-1617/8, the founder of the Āzar Kayvān school) in Patna, about which Mas'ūd Rezā Modarresī Chahārdehī reported in his New Persian article in 2012 (see "Noskhe-ye Khattī-ye Dīvān-e Mōbed Kelīd-e Peydāī-ye Nevīsande-ye Dabestān al-Mazāheb va Peydāī-ye Mazār-e Āzar Kayvān", *Mehr va Nāhid: Pāzhūhesh-e Īrān Shenāsī*, pp. 73-79). Much of my general information in regard to its discovery is greatly indebted to this article.

Chapter 1 presents an overview of Patna in Mughal India mainly from the perspective of the locations of Sufi *khānqāhs*. Take, for example, at the time of Āzar Kayvān, the Qādiriyyah order and the Suhrawardiyyah-Firdawsiyyah order had flourished at the western and eastern suburbs of Patna.

Chapter 2 surveys Chahārdehī's article. My Japanese summary of this New Persian article tells us that he visited Patna for three times and reached the mausoleum by the guide of two informants, Dr. Syed Shah Haseen Ahmad (Khanquah Hazrat Diwan-e Shah Arzani) and Dr. Latīq al-Haqq (the Munimiyyah order). The main issue here is the exact location of the so-called mausoleum of Āzar Kayvān, about which the article did not mention explicitly.

Chapter 3 is concerned with my own travel to Patna (with Miss Mahsa Tavāna and Mr. Pradeep Prabhakaran) during February to March in 2016. I had looking for the mausoleum everywhere in Patna and finally found it at the district of Kayvān Shokūh or Jaytulī, where Dargāh Kacchī, Dargāh Pakkī (see photo 1 and 2, those two belong to the Suhrawardiyyah-Firdawsiyyah order) and Dargāh Raipura (see photo 3, this belongs to the Munimiyyah order founded in the 18th century, i.e. after the death of Āzar Kayvān) enclosed the mausoleum. But the oral tradition about it is now interrupted in that the almost whole Muslim population in this district had emigrated to Pakistan at the time of partition of India in 1947. Only Dr. Syed Shah Haseen Ahmad and Dr. Latīq al-Haqq (see photo 4 and 5, I happened to see same informants of Dr. Chahārdehī!) transmitted the tradition that this is the place noted in connection with the mausoleum of Āzar Kayvān. Unfortunately, however, that mausoleum itself was already destroyed 30 years ago and this location is now occupied by a Hindu temple which is still under construction (see photo 7 and 8). According to the two informants, although new coming Hindus tried to complete this temple again and again, they could not succeed it for the curse of Āzar Kayvān buried under the ground.

In conclusion, I could not find any decisive evidence to identify this place as the location of the mausoleum of Āzar Kayvān except the oral tradition of two Muslim Sufi leaders in Patna. But if this is true, I can suggest that the Āzar Kayvān school was in a good relationship with the Suhrawardiyyah-Firdawsiyyah order at the eastern suburb of Patna in the first half of the 17th century.

パトナーにおける伝・アーザル・カイヴァーン廟—伝説と実像—

### 目次

序論：2010年以降のアーザル・カイヴァーン学派研究の成果

第1章：近世パトナーの歴史的・地理的概観

第1節：近世パトナーの成立

第2節：近世パトナーの経済活動

第3節：近世パトナーの各地区の特色

第4節：近世パトナーのスーフィー聖者廟

第5節：近世パトナーの仏教遺跡

第6節：モーベド・シャー活躍の地？

第2章：先行研究

第1節：先行研究の書誌情報

第2節：先行研究の要約(パトナー訪問の根拠/第1回パトナー調査/デリー調査/第2回パトナー調査/ムンバイ調査/第3回パトナー調査)

第3章：パトナー調査(2016年2月～3月)

第1節：調査の方法

第2節：カイヴァーン・ショクーフ地区のイスラーム聖者廟

第3節：ライク・アル・ハック師とハスィーン・アフマド

師の情報

- 第4章：パトナー調査の結果の分析  
 第1節：インフォーマントの信頼性  
 第2節：先行研究との照合  
 第3節：「伝・アーザル・カイヴァーン廟」の位置の特徴  
 結論：伝・アーザル・カイヴァーン廟とアーザル・カイヴァーン学派の理解

参考文献表

- 写真1：カッチー聖者廟  
 写真2：パッキー聖者廟  
 写真3：ライプラー聖者廟  
 写真4：ライク・ル・ハック師への聞き取り  
 写真5：ムンイミーヤ教団での聞き取り  
 写真6：ムンイミーヤ教団本部  
 写真7：伝・アーザル・カイヴァーン廟跡のヒンドゥー教寺院  
 工事現場  
 写真8：伝・アーザル・カイヴァーン廟跡地に建つ工事中のヒンドゥー教寺院  
 地図：近世パトナー市街図

序論：2010年以降のアーザル・カイヴァーン学派研究の成果

サファヴィー朝・ムガル帝国期に活躍した神秘主義者アーザル・カイヴァーン（西暦1533年～1617/8年）は、イラン西部のペルシア州エスタフルに生まれ、北インドのビハール州パトナーで没した。彼が創立した教団は、彼の没後約50年間に亘って北インドで栄え、この学派の近世ペルシア語文献は44冊中8冊が現存している。このアーザル・カイヴァーン学派の研究としては、2010年以降、下記のような収穫があった。

- Qazvīnī 2009-10・・・アーザル・カイヴァーンの後継者を名乗るハキーム・アッパース・カイヴァーン・ガズヴィーニー師（1862～1938年）のペルシア語文献『神智学の書 (*Ketāb-e 'Erfān Nāme*)』の校訂
- Chahārdehī 2012・・・アーザル・カイヴァーンの墓廟の位置に関する報告論文
- Chahārdehī 2012-13・・・アーザル・カイヴァーンのペルシア語韻文著作*Jām-e Kay Khosrow Sharh-e Mokāshefāt-e Āzar Kayvān*の校訂
- 青木 2015a, 2015b, 2016, 2017, 2018・・・アーザル・カイヴァーン学派のペルシア語文献*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dād-dukht va Keyfiyat-e Ū*の校訂
- Goshtāsb 2018 (forthcoming)・・・現存するアーザル・カイヴァーン学派文献*Shārestān-e Chahār Chaman*と*Dabestān-e Mazāheb*から、失われたアーザル・カイヴァーン学派文献の逸文を蒐集

本稿ではChahārdehī 2012に注目し<sup>1</sup>、アーザル・カイヴァーンの墓廟をテーマとする。その為に、筆者は2016年2月から3月にかけて、Chahārdehī 2012が指摘する「伝・アーザル・カイヴァーン廟」を訪れ、その真偽を検証し、併せてパトナー周辺を調査した。その結果、Chahārdehī 2012の情報の幾つかを修正した上で、追加情報を得ることができた。以下では、近世パトナーの概観、Chahārdehī 2012の要約、筆者のパトナー調査の順で論を進め、「伝・アーザル・カイヴァーン廟」を検証する。つまり、本稿は、16～17世紀のインド・イランに於ける神秘主義教団を取り上げ、その教祖の墓廟の位置から教団の性格に迫る個別事例の一研究である。

第1章：近世パトナーの歴史的・地理的概観

最初に、近世パトナー史に関してはAhmad 1988a、Ahmad 1988b、Gupta 1998、Gupta 2009を、パトナーのスーフィー教団史についてはMunemia 2015を参照しつつ、アーザル・カイヴァーン在世当時のパトナーの歴史的・地理的条件を概観したい。

第1節：近世パトナーの成立

パトナーは、紀元前5世紀にマガダ国が盆地都市ラージャグリハから遷都して以来栄えたパータリプトラの後継都市に当たる。しかし、ガンジス川に面している為に幾多の洪水に襲われ、その度に相貌を一新してきた。本稿で問題とする17世紀のパトナーの原型は、16世紀にこの街を拠点としたスール朝（1539～55年）によって整えられた。初代王シェール・シャーは、ガンジス川の中州（現在は消滅）に城砦を築き、それに南面するガンジス川南岸に近世パトナーの市街地を造成した。

アーザル・カイヴァーンと同時代のパトナーの記録としては、英国商人Ralph Fitch が1588年に同市を訪れ（Ahmad 1988a, p. 55）、ウラマーの'Abd al-Latif Ahmadābādīも1608年に同市を訪れているものの（Ahmad 1988a, p. 78）、両者とも何の証言も残していない。1632年8月には、英国商人Peter Mundy（1600～67年）がパトナーを訪れて、「東西3マイル（＝約4.8キロ）に及ぶ街である」との記述を残している（Ahmad 1988a, p. 54）。17世紀のパトナーが、ガンジス川に沿った細長い街だったことが分かる。1641年の評価では、この街の人口は、およそ20万人とされている（Ahmad 1988b）。

1703年になると、アウラングゼーブの孫の'Azim al-Shān（1664～1712年）がビハール州総督として赴任した際に、パトナーに城壁及び7つの城門を造成している。これで、18世紀初頭のパトナー市街の公的範囲が明確になる。それによると、「パトナーの東門はPurab Darvaza、西門はPachchim Darvazaである」（Ahmad 1988a, p. 74）。この時造成された東門Purab Darvazaは現在のマンスール・ギャンジ地区にあり、西門Pachchim Darvazaは現在のサーディクブル地区にある（地図参照）。この間は約3キロで、Peter Mundyが証言している4.8キロよりはやや狭い範囲に収まる。

また、Ahmad 1988bによると、この「イスラーム期パトナー市街」は、「ガンジス川南岸に沿って、プーンプーン川との合流地点まで拡大した」とされる。このプーンプーン川は、東門Purab Darvazaの更に東方4キロ付近

を流れており、いわば城壁外の東部地域である。このブーン川までの城壁外域をどう捉えるかが、後の議論の焦点になる。

最後に、18世紀初頭のパートナーの範囲を、現在のパートナー市街区に重ねてみよう。西門Pachchim Darvazaは、現在のパートナー中心部から4キロ以上東に位置する。ここを起点として、更に東に3キロほど城壁が張り巡らされていたことになる。現在のパートナーに比べると、18世紀初頭のパートナーはかなり東に寄った位置にあったことが窺える。パートナー市街が西に向かって発展するのは、英領期に入ってからである。

### 第2節：近世パートナーの経済活動

パートナーは、ガンジス川の水運によって成立している。特に、雨期（7～9月）に入ると陸上交通が途絶し、パートナーの物流は水運に頼っていたとされる。近世パートナーにも15を超えるガート（＝川岸埠頭）が存在し、アッラーハーバード・ペナレス方面から下り、或いはベンガル湾から遡ってくる舟運の船着き場として活用されていた。

17世紀にこの水運を用いてパートナーからカルカッタに輸出されていた主要産品は、火薬の原料となるカリウム硝酸塩とされる（Gupta 1998, p. 122）。遊牧帝国から火薬帝国への移行期にあって、西欧列強の需要に応じたものとされる。これに次いで、コットン織物の完成品も輸出されていた（Gupta 2009, p. 4）。こちらは、17世紀前半まではインド国内、イラン、中央アジアを主たる輸出先にしてしていたが、17世紀後半以降はヨーロッパに切り替わった（Chatterjee 1996, p. 152）。この他、17世紀当時のパートナーは、ビハール州域内の米、ミルク、ギー油、砂糖など産品の集積地として栄えた（Singh 2005, p. 64）。

### 第3節：近世パートナーの各地区の特色

17世紀のパートナーの各地区の特色を、西部⇒中心部⇒東部へ向かって挙げてみよう。17世紀初頭にビハール州総督だったAfdal Khān（在任1608～12年。シャー・ジャハーン王妃ムムターズ・マハルの長姉マーリカ・バーヌーの夫）がChowhattaの東地区に住んでいたことから（Gupta 1998, p. 142）、アーザル・カイヴァーン当時のパートナーの行政の中心はChowhattaの東地区だったと考えられる。これは、18世紀初頭に築造された西門Pachchim Darvazaの西側に当たる。Afdal Khān統治下のパートナーの中心は、18世紀のパートナー市街地よりも西にずれていたようである。

Chowhatta地区の南に当たるKankarbagh地区は、アクバル帝（在位1556～1605年）によってサファヴィー朝の第2代国王シャー・タフマースプ（在位1524～76年）の息子にジャーギールとして施与されたので、17世紀にはイラン系の名士が多数居住していた（Gupta 1998, p. 102）。1620年代の数年間パートナーに住んでいたMuhammad Sādiqが、著書*Subh Sādiq*の中でパートナーの名士としてイラン系の名前を多数挙げているのは、このような事情による（Ahmad 1988, p. 77）。

18世紀パートナー市街の中央部に当たるKhajekalanガートの傍らには、パートナー市内最古のモスクで、1489年創建のBegu Hajjam ki Masjidがある（Gupta 2009, p. 16）。中世の主要なモスクは、この周辺に集中している。このうち、Mirzā Ma'sūmモスクは1614年

創建（Gupta 2009, p. 17）、Ibrāhīm Khānモスクは1618年創建（Gupta 2009, p. 18）と伝わるので、前者はアーザル・カイヴァーンも目にしていた可能性がある。

18世紀のパートナー東門Purab Darvazaの更に東に広がるKayvān Shokūh地区は、高官が住む住宅地で、その高官たちが学者や詩人を招待した文化人地区だったとされる（Gupta 2009, p. 14）。このように見ると、17世紀パートナーの市街地は、18世紀初頭に造成された城門の東西に大きく張り出していたようである。これは、街の東西幅が4.8キロだったとする1632年のPeter Mundyの証言によって裏付けられる。

### 第4節：近世パートナーのスーフィー聖者廟

次に、パートナーにおけるスーフィー聖者廟を概観しよう。聖者廟の創建年代から類推すると、パートナーのスーフィー聖者廟は、最初に東西の郊外地区に設けられた。18世紀のパートナー市東門Purab Darvazaの外で、且つブーン川よりは西側にあるJethuli村には、スフラワルディー教団のスーフィーShihāb al-Dīn Jagjot（1268年没）の廟があり、デリー以東の東インド最古のスーフィー廟の一つに数えられる。パートナーの西30キロ地点のマネール村には、スフラワルディー教団系フェルドゥスィー教団のShaykh Yahyā Manērī（13世紀）の孫Makhdūm Sharaf al-Dīn（1263～1381年）の廟がある（Ahmad 1988, pp. 76-77）。パートナーに於けるスーフィー聖者廟の造営は、市の中心部ではなく、東西の郊外から始められたことが窺える。

近世パートナーの市街地の中心部にスーフィーを招聘した人物としては、上述のビハール州総督Afdal Khān（在任1608～12年）が挙げられる。彼は、Sayyid Pīr Damaria、Shāh Arzānī、Shāh Abū al-Barakāt Muhammad Fā'izの3人のスーフィーを招いたとされる（Munemia 2015, p. 10）。この3人の内訳は、以下の通りである。

- ① スフラワルディー教団のSayyid Pīr Damariaのジャーギール（施与地）は、上述のKankarbagh地区の西部にあった（Gupta 1998, p. 103）。この為、この一帯にはスフラワルディー教団系の施設が多かった。但し、現存するSayyid Pīr Damariaの墓廟は、ガンジス川北岸のManapur地区に位置している。
- ② 西門Pachchim Darvazaの西側、現在のムハンマドブル地区には、Shāh Arzān Dargāh（別名Sultān Ganj廟）が聳えている（Gupta 1998, pp. 123, 129）。ここは、カーディリー教団の聖者Shāh Arzānが1618年に没した場所で、1623年に現在の廟が創建された（Gupta 2009, p. 2）。Afdal Khānが居を構えたChowhatta地区に近いので、彼とShāh Arzānの関係を窺わせる。
- ③ Shāh Abū al-Barakāt Muhammad Fā'izについては、筆者には詳細を明らかに出来なかった。

この他、サーディクブル地区東部、即ちアズィーマーバードの城壁の中心部のガンジス川河畔には、ナクシュバンディー教団系のMun'imīyahムンイミーヤ教団の本部が置かれている。この教団本部は、本来はナクシュバンディー教団系シャッターリー教団のスーフィーMulla

Meetanムッラー・ミータン（アウラングゼーブ時代）が創建したもののだが、後にナクシュバンディー教団系スーフィーShāh Muhammad Mun'im Pākシャー・ムハンマド・ムンイム・パーク（1671～1771年）が自派の拠点として再建した（Munemia 2015, pp. 11-14）。現在では、ムンイミーヤ教団の聖者廟として機能している。

全体として、パトナーでは、13～14世紀に東西の郊外にスフラワルディー教団系の聖者廟が先行して創建され、17世紀前半にAfdal Khānの招聘によって市街地内にカーディリー教団系、スフラワルディー教団系の聖者廟が相次いで建てられている。また、17世紀半ば以降には、市の東郊にナクシュバンディー教団系系系の聖者廟も創建されている。アーザル・カイヴァーン在世当時、彼の眼には、東郊と市内に広く分布するスフラワルディー教団の聖者廟と、市内に集中するカーディリー教団の聖者廟が映っていた筈である。

### 第5節：近世パトナーの仏教遺跡

アズィーマーバードの城壁の南外延部に当たるPahari地区には仏教遺跡が多い（Gupta 1998, p. 105）。特に、この地点にある「5人兄弟の丘」と通称される丘は、アショーカ王が造営させたストゥーパ遺跡と推定されている（Allen 2003）。但し、アーザル・カイヴァーン在世当時にこれがどの程度認知されていたかは不明である。

### 第6節：モーベド・シャー活躍の地？

複数のパトナー郷土史家が、「アーザル・カイヴァーンの孫弟子で『ダベスターネ・マザーヘブ』の著者であるモーベド・シャーは、Gulzarbaghで執筆していた」と記述している（Ahmad 1988, p. 66; Gupta 1998, p. 105）。このGulzarbaghとは、サーディクプル地区の北西部に当たり、パトナーの積み出し港の1つガイ・ガートに面した地域である。この情報に信憑性があるとしたら、17世紀当時のアーザル・カイヴァーン学派の本部の位置を特定する重要な手掛かりである。しかし、この記述には出典が明記されていない。

## 第2章：先行研究

### 第1節：先行研究の書誌情報

次に、本稿の主題に関する唯一の先行研究であるChahārdehī 2012の内容を要約しよう。これは、イラン暦1390年12月20日（＝西暦2012年3月10日）に提出され、『太陽と金星：イラン学研究』（*Mehr va Nāhid: Pazhūhesh-e Īrān Shenāsi*）のpp. 73-79に掲載されたペルシア語論文『『ダベスターン・アル・マザーヘブ』の著者を明らかにする『モーベド・ケリドの詩』の写本とアーザル・カイヴァーン廟の発見』（Chahārdehī 2012）である。この論文の後半（pp. 77-79）が、アーザル・カイヴァーン廟の位置を扱っている。

### 第2節：先行研究の要約

この論文後半は、著者がパトナーを3回、デリー、ムンバイを各1回訪れてアーザル・カイヴァーン廟を探した紀行文の体裁をとっており、それぞれの日時の記載もない。時間的な前後関係も不明確である。記されているのは、①調査の根拠、②訪問地、③インフォーマント、④蒐集した口承である。以下では、それらを整理してみよう。

パトナー調査の根拠・・・チャハールデヒー氏が訪問を思い立った根拠は、2010年に出版されたハキーム・アッバース・カイヴァーン・ガズヴィーニー（1862～1938年）の著書『神智学の書』（Qazvīnī 1388 AH）の中のアーザル・カイヴァーン廟は、パトナー市アズィーマーバード地区(dar shahr-e Pātnā dar mahalle-ye 'Azīmābād)の大河の河畔にある（Chahārdehī 2012, pp. 78-79）との記述である。これを信じるならば、19世紀後半から20世紀前半の段階で、アーザル・カイヴァーン廟の位置は特定されていたことになる。

Chahārdehī 1393 AHによると、典拠となった『神智学の書』の著者Hakīm 'Abbās Kayvān Qazvīnīハキーム・アッバース・カイヴァーン・ガズヴィーニーは、ヒジュラ暦1277年（＝西暦1862年）にガズヴィーンで生まれ、テヘランやメッカで研鑽を積んで、シーア派ウラマーの最高位の称号アーヤトゥッラーを得た人物である。また、ネウマトゥッラー教団の第36代指導者サーレフ・アリー・シャーの弟子だったこともあるが、後に決別し、独自の神秘主義を模索した。1938年にラシュトのアメリカ病院で死去し、ラシュト・ソレイマーン墓地に葬られている。このカイヴァーン・ガズヴィーニーが、如何にしてパトナーのアーザル・カイヴァーン廟の位置情報を入手したのかは不明である。

エクゼター大学のサッジャード・リズヴィーによれば、カイヴァーン・ガズヴィーニーは手稿 *Rāgushā* の中でハーディー・サブゼヴァーリー（1873年没）を高く評価している（Rizvi 2011, pp. 483-84）。また、チャハールデヒーによると、アーザル・カイヴァーンを尊敬していたが故に、彼は実名アリーに替えてカイヴァーンを名乗り、また、彼の著作『精神的・物質的な天界飛翔の注釈に関する説教』（Chahārdehī 2012-13の後半部分に収録）には、アーザル・カイヴァーンの著書『ジャーム・カイホスロー』の影響が垣間見られる。上記の指摘が正しければ、カイヴァーン・ガズヴィーニー自身謎めいた思想家で、彼の情報ネットワークの解明が待たれる。

第1回パトナー調査・・・日時不明の第1回パトナー調査では、チャハールデヒー氏は以下の3ヶ所を巡り、それぞれ下記のようなインフォーマントに会っている。

- ① シーア派のホセイニーエ・モスク・シャードマーン・・・パトナーの郷土史家で聖者廟に詳しい「セイイェド・レザー・カーゼミー氏」
  - ② マドラセ・エルミーエ（マドラセ・ソレイマーンイーエ）・・・マドラセ・ソレイマーンイーエの教師の「セイイェド・レザー・レザヴィー氏」
  - ③ ホダーバフシュ東洋図書館にて、「アブー・モザッファル・アーレム教授」、パトナーの墓地についての著書のある故ギヤームッディーン・エムティヤース教授の息子の「エムティヤース博士」
- しかし、何ら情報を得られなかったとある。

デリー調査・・・日時不明のデリー調査では、チャハールデヒー氏は、『ディーヴァーネ・モーベド』の校訂者である「アーベド・レザー・ビーバル教授」、及び「故アミーール・ハサン・アーベディー教授」と会見した。しかし、何ら情報を得られなかったとある。但し、この時に前者を通じて、パトナーにあるシャー・アルザーン・ダルガーの指

導者ハスィーン・アフマド博士を知ったことが、第3回パートナー調査に繋がる。

第2回パートナー調査・・・日時不明の第2回パートナー調査では、パートナーの[退職教授ハビーブ・アル・モルサリー博士]、[メフディー・ハージェ・ピーリー]、また、パートナー郊外ダーナープールのサッジャーデ・ネシーンである[タルヘ・レスヴィー・バルグ博士]、[リズヴァーヌッラー・アラヴィー博士]と会見した。しかし、情報を得られなかったとある。

ムンバイ調査・・・日時不明のムンバイ調査では、ルパールスィー共同体とゾロアスター教徒の学校に行き、会見した。しかし、具体的な情報を得られなかったとある。

第3回パートナー調査・・・日時不明の第3回パートナー調査では、上述の[ハスィーン・アフマド博士 (Dr. Hasin Ahmad)]と会見し、「私の友人の一人は、アーザル・カイヴァーンの墓廟に関して、信頼できる情報を持っている」との情報を得た。その後、その友人である[ラティーク・アル・ハック博士 (Dr. Latīq al-Haqq)]が合流し、「我々は幼少期から、故シャー・ファリド・アル・ハック・エマーディーと共に、アーザル・カイヴァーン廟へ巡礼していた」との情報を得た。その後、この2人と、「アーザル・カイヴァーン廟」へ巡礼に赴いた。その具体的な位置を、チャハールデヒー氏は以下のように記述している。

パートナー市ジャクリー地区にある。最寄り駅はインド鉄道のバンカーガート駅で、駅を下りた直ぐのところ、有名なカッチー聖者廟の近くで、国道の南側に当たる。ガンジス川から南へ250メートルで、現在では区分・水・空気の変化、自然地理の変遷によってガンジス川が後退しており、幾つかの家と1つの道路が、川(＝ガンジス川か?)とアーザル・カイヴァーン廟の間に位置してしまっている。

続けて、「アーザル・カイヴァーン廟」を訪れた感激を、以下のように記している。

今や、アーザル・カイヴァーンの墓地には、12個の柱が見出せる。この建築物は、アーザル・カイヴァーン学派の精神的空間に一致している。私は、確信を持って表明したい。この論文に付属して、私が撮影したアーザル・カイヴァーン廟と庭園の写真を最初に提示したい。(Chahārdehī 2012, p. 79)



写真1：カッチー聖者廟

チャハールデヒー氏の調査で実質的なインフォーマントは、ハスィーン・アフマド博士とラティーク・アル・ハック博士の2名である。また、「アーザル・カイヴァーン廟」を訪れたものの、それを本物と断定する理由は2名の口承伝承である。この論文に添付された白黒写真には、何らかの建築物が映ってはいないものの、文中で言及されている「12個の柱」は見出せない。

### 第3章：パートナー調査（2016年2月～3月）

#### 第1節：調査の方法

色々と疑問の多いチャハールデヒー氏の報告を受けて、筆者は下記の方法で、2016年2月～3月に、パートナーで伝・アーザル・カイヴァーン廟の調査を行った。目的は2つである。第1に、直接「伝・アーザル・カイヴァーン廟」を訪れ、周辺状況を調査すること。第2に、現地のインフォーマントに直接取材し、更なる情報を聞き出すこと。

この為に、2名の同行者にご協力頂いた。第1に、ゲッティンゲン大学イラン学研究所博士課程の院生(当時)で、アーザル・カイヴァーン学派研究で博士論文を執筆中のMahsa Tavana女史。第2に、ヒンディー語の通訳として、ケーララ州在住の映画俳優Pradeep Prabhakaran氏。両氏には深甚の謝意を表したい。以下はその際の調査の記録である。

#### 第2節：カイヴァーン・ショクーフ地区のイスラーム聖者廟

論文に記載されていた「パートナー市ジャクリー地区」<sup>2</sup>という地名は実在しなかった。その代わりに、「ジャイトゥリー地区」という地名があるが、これはパートナー市東郊の農村部の地名であって、現在の行政区画上はパートナー市に含まれない。ここが、嘗てのカイヴァーン・ショクーフ地区に該当する。また、バンカーガート駅周辺には、実際に機能している聖者廟は存在しなかった。代わりに、古寂びたイスラーム教徒墓地を2つ見出せたものの、明らかに聖者廟とは性質が異なる。

調査範囲をバンカーガート駅から南北に延びる線路とガンジス川に挟まれた地区に拡大すると、駅を起点に北西から南東に掛けて、以下の3つの聖者廟を確認できた。

- ①カッチー聖者廟Dargah Kachchi (写真1参照)
- ②パッキー聖者廟Dargah Pakki (写真2参照)



写真2：パッキー聖者廟

③ライプラー聖者廟Dargah Raipura (写真3参照)

Pradeep Prabahkaran氏の通訳を介して、これらの聖者廟の廟守りたちに聞き込み調査すると、以下の事実が判明した。

カッチー聖者廟は、上述のスフラワルディー教団系フェルドゥスィー教団のShaykh Yahyā Manērī (13世紀)の孫のMakhdūm Sharaf al-Dīn (1263~1381年)の義理の父に当たるスーフィー聖者ピール・ジャグ・ジョート・バルヒーPīr Jag Jot Balkhīの墓廟で、西暦13~14世紀頃に造営された。

バッキー聖者廟は、Shāh Ādam Sūfīシャー・アードム・スーフィーというスーフィー聖者の墓廟と聞いた。この人物についての詳しい情報は得られなかったものの、カッチー聖者廟に所縁のスーフィーである点は確かめられた。だとすると、シャー・アードム・スーフィーも、西暦13~14世紀のフェルドゥスィー教団のスーフィーと推測される。

ライプラー聖者廟は、上述のナクシュバンディー教団系スーフィーShāh Muhammad Mun'im Pākシャー・ムハンマド・ムンイム・パーク (1671~1771年)の初代サッジャーデ・ネシーン(教団指導者)であるMawlānā Hasan Razā Raipūrīマウラーナー・ハサン・ラザー・ライプラーを中心とした墓廟である(ハサン・ライプラーについては、Munemia 2015, p. 20参照)。歴代のサッジャーデ・ネシーンがパトナー近郊のライプラー出身だったこともあり、彼らの墓廟群はライプラー聖者廟と呼び習わされている。こちらは、18世紀以降のムンイミーヤ教団の聖者廟である。

第3節：ライク・アル・ハック師とハスィーン・アフマド師の情報

ここまで聞き取りしたところ、同行してくれていたカッチー聖者廟の墓守が、貴重な情報を提供してくれた。即ち、「アーザル・カイヴァーンとかいうスーフィー聖者については、ディーヴァーン・シャー・アルザーニー聖者廟のサッジャーデ・ネシーンであるハスィーン・アフマド師が最も詳しいから、彼を訪ねたら良い」とのことであった。また、「この問題ならば、ムンイミーヤ教団のスーフィー、故シャー・ファリド・アル・ハック・アマーディー師と彼の息子ライク・アル・ハック師<sup>3</sup>も詳しいので、パトナー市内にあるムンイミーヤ教団の本部を訪れたら良い」との助言もあった。

偶然ながら、全く別の経路を辿りつつ、チャハールデーヒー氏が獲得したインフォーマントと同一人物の名前が2名挙がったので、パトナー市内に戻ってディーヴァーン・シャー・アルザーニー聖者廟とムンイミーヤ教団本部を訪れ、この2人に教えを乞うた(写真4、写真5、写真6参照)。以下が、聞き取り情報である。

ハスィーン・アフマド師の口伝・・・1600年代にパトナーで成立したディーヴァーン・シャー・アルザーニー教団では、下記のような口承伝承がある。——即ち、アフガニスタンからパトナーへ移住して1618年に亡くなった聖者シャー・アルザーニー(上述)は、しばしば没年と死没地が一致するアーザル・カイヴァーンと混同されるものの、これは間違いである。シャー・アルザーニーはカーディリー教団のスーフィーであり、アーザル・カイヴァー



写真3：ライプラー聖者廟

ンは移住当初はゾロアスター教徒であった。しかし、アーザル・カイヴァーンはパトナーに定住してからは、カイヴァーン・ショクーフのムスリム地区に居を定め、やがてイスラームに改宗した。これを記念して、イスラーム教徒はこの地区全体を「カイヴァーン・ショクーフ」と名付けた。また、アーザル・カイヴァーンは、偉大なスーフィーだったので、彼の弟子たちは現在に至るまでパトナーに残っている。(この「現代パトナーに於けるアーザル・カイヴァーン学派」情報は、Chahārdehī 2012-13, p. 20でも言及されているものの、現地では一向に確認できなかった。)

ライク・アル・ハック師の口伝・・・師は、直接車で伝・アーザル・カイヴァーン廟まで案内して下さった。師によると、カッチー聖者廟の手前、バンカーガート駅の北東側、国道の南側に、建設途中で未完成状態のヒンドゥー教寺院が建っていた。我々は何度もこの前を通った筈だが、単なる工事現場として見過ごしていた(写真7参照)。

これに関するムンイミーヤ教団の口承伝承は以下の通りである。——もともとこの地区は、カイヴァーン・シェクーフ地区と言い、アーザル・カイヴァーン学派が住んでいた。アーザル・カイヴァーンの墓廟も、もともとこの地点にあった。しかし、ここはムスリム地区なので、1947年のインド・パキスタン分離の際に多数の住民がパキスタンへ移住してしまい、地区全体が空白地帯になった。そこへ移住したヒンドゥー教徒が不法にアーザル・カイヴァーン廟を取り壊し、ヒンドゥー寺院を建設しようとしたものの、何度やっても工事に不備が現れて完成させることができず、結局寺院は未完成のまま放置された(写真8参照)。この寺院の中央部分の下に、アーザル・カイヴァーンの遺体が埋まっている筈である。自分はイスラーム教徒なので、未完成とは言えヒンドゥー教寺院を訪れるのは気が進まず、滅多にここに足を踏み入れない。

先行研究への追加情報・・・1点だけChahārdehī 2012への追加情報を挙げるとしたら、先行研究では、単にアーザル・カイヴァーン廟の位置だけを問題にしていたのに対し、ハスィーン・アフマド師の情報では、「アーザル・カイヴァーンの移住先=アーザル・カイヴァーン学派の本部=アーザル・カイヴァーン廟の位置」と、3者を同一視していた。この点は、今回の成果として強調して良いと思わ



写真4：ライク・ル・ハック師への聞き取り



写真5：ムンイミーヤ教団での聞き取り



写真6：ムンイミーヤ教団本部



写真7：伝・アーザル・カイヴァーン廟跡のヒンドゥー教寺院工事現場

れる。

#### 第4章：パートナー調査の結果の分析

##### 第1節：インフォーマントの信頼性

以上、チャハールデヒー氏と同一のインフォーマント2名に行き着き、Chahārdehī 2012の情報を補うデータを聞き取ることができた。伝承の根拠については、ハスィーン・アフマド師とライク・アル・ハック師の情報は、教団単位の口承が元になっていた。前者が依拠するディーヴァーネ・シャー・アルザーニー教団は、アーザル・カイヴァーン学派のパートナー移住と時を同じくして1600年代にパートナーで設立された。後者が依拠するムンイミーヤ教団は、設立時期は18世紀と遅いものの、カイヴァーン・ショクーフ地区に集中的に歴代サッジャーデ・ネシーンの廟を造営し、この地区に深い地縁を持つ。Chahārdehī 2012では不明だったものの、2人のインフォーマントのバックグラウンドがこのようである以上、彼らから得られたデータの信頼性には、一定の評価ができる。

但し、肝心の墓廟が破壊され、その上にヒンドゥー教寺院が未完成状態で放置されている以上、これがアーザル・カイヴァーン廟跡地であるとの確実な証拠はない。あくま

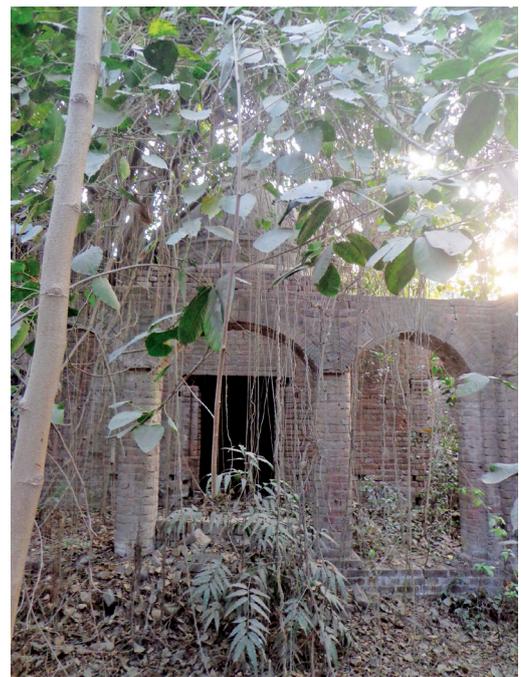
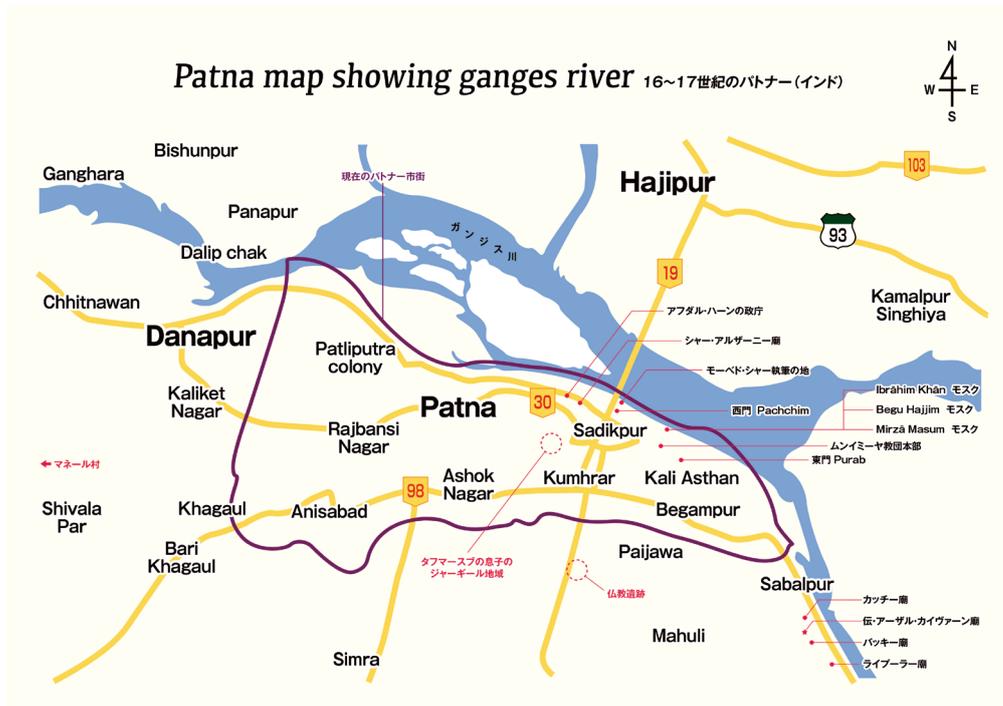


写真8：伝・アーザル・カイヴァーン廟跡地に建つ工事中のヒンドゥー教寺院



地図：近世バトナー市街図

で現地の口碑に基づく推測の域を出ないが、先行研究と照合する価値はある。

### 第2節：先行研究との照合

先行研究では、①カイヴァーン・カズヴィーニ師が「バトナー市のアズィーマーバード地区の大河の近く」と述べ、②チャハールデヒー氏が筆者と同じ「バトナー市ジャクリー地区で、有名なカッチー聖者廟の近く」と特定した。となると、後者は検討する必要がないが、独立した情報である前者は、検討の価値がある。

その為には、19世紀後半から20世紀前半の段階で、「バトナー市のアズィーマーバード地区」とは、具体的にどの範囲を指すのかを明確にしなくてはならない。ここで、第1章第1節で述べたAhmad 1988bの「イスラーム期バトナー市街」情報が生きてくる。旧バトナー市街がアズィーマーバード期に大きく東へせり出した「Purab Darvazaからブーンブーン川までの地域」こそ、旧バトナー市街ではなく、イスラーム期に完成されたと云う意味で、アズィーマーバード地区と呼ばれるに相応しい。

実際、イスラーム教徒は、英領期の発展から取り残されたバトナー市東部地域を、20世紀になってからも「アズィーマーバード」と呼んでいたとされる (Ahmad 1988b)。そして、この一帯は (現在の) ジャイトゥリー地区にほぼ重なるので、カイヴァーン・カズヴィーニ情報とチャハールデヒー情報は、基本的には同一の墓廟を指して、アーザル・カイヴァーン廟と特定しているのだと思われる。

### 第3節：「伝・アーザル・カイヴァーン廟」の位置の特徴

この墓廟は、真偽は別として、19世紀末か20世紀初頭以降、アーザル・カイヴァーン廟と認識されていたことになる。となると、肯定するにせよ否定するにせよ、決定打

に欠ける墓廟の信憑性の問題は棚上げにして、この「伝・アーザル・カイヴァーン廟」の位置は、最低限、「何故、そこがアーザル・カイヴァーン廟と伝えられるようになったのか？」と云う問題を提起する。以下では、この地区がアーザル・カイヴァーン学派の本拠地だとされる上で、どのような特徴を備えていたのかを検討したい。

まずは、第1章で述べた情報を基にして、16世紀後半～17世紀初頭と想定されるアーザル・カイヴァーンのバトナー移住の時期に、現在の「ジャイトゥリー地区」がどのような地域だったのかを復元してみよう。この地区は、17世紀初頭のビハール州総督だったAfdal Khānが住んでいたChowhattaとは、バトナー市街の西と東に10キロ以上懸け離れた立地条件にあり、アクバル時代にイラン系名士が住んだとされるKankarbagh地区とは更に距離がある。

18世紀初頭に造営されたバトナー市の東門Purab Darvazaは、まだ存在していない。18世紀になると、この一帯はKayvān Shokūh地区と命名されて、文化人が住む地域だったとされるが、アーザル・カイヴァーンの在世当時とは何の関係もない話である。また、近世バトナーのガートはGulzarbagh周辺に集中しており、カイヴァーン・ショクーフ地区にはガートを見いだせない。バトナー市内の仏教遺跡からも、直線距離で10キロ以上離れている。

結局、15～16世紀の時点では、ここは旧バトナー市街の東郊に過ぎず、確認できる目立った特徴としては、スワラワルディー教団系フェルドゥスィー教団のカッチー聖者廟とパッキー聖者廟が建っていた程度である。同時代のAfdal Khānに招聘されたスーフィー聖者シャール・アルザーンがバトナー中心部に住んでいたのに比べると、拠点の地理的選択には相当の懸隔がある。

## 結論：伝・アーザル・カイヴァーン廟とアーザル・カイヴァーン学派の理解

筆者は、アーザル・カイヴァーン学派のインド移住の動機として、パートナーのガートでの経済活動、ムガル帝国支配者層との関係、仏教遺跡との関係などを想定していたものの、伝・アーザル・カイヴァーン学派本部＝墓廟の位置から判断する限り、それらは決定的に的外している。

仮に、これをアーザル・カイヴァーン廟と捉えた場合、これら2つの聖者廟に囲まれるようにして「伝・アーザル・カイヴァーン廟」の跡地が存在している以上、スフラワルディー教団系フェルドゥスィー教団との間に、ある程度関係を想定できるだろう。もちろん、これが確実にアーザル・カイヴァーン廟であると言う保証がない以上、問題の立て方は、「何故、伝・アーザル・カイヴァーン廟＝アーザル・カイヴァーン学派本部は、16～17世紀のスフラワルディー教団系フェルドゥスィー教団の聖者廟に挟まれた地域に特定されているのか？」としかならない。ただ、スフラワルディー教団系フェルドゥスィー教団との関係性という視点は、今後、アーザル・カイヴァーン学派文献を分析する上で、貴重な視座を提供する。仮に文献上のフィードバックがあるとしたら、上記の口承は補強されるだろう。

最後に、チャハールデヒー氏の誤解を修正したい。氏は、上掲のように「今や、アーザル・カイヴァーンの墓地には、12個の柱が見出せる。この建築物は、アーザル・カイヴァーン学派の精神的空間に一致している」と結論しているが、現在建っている建造物は未完成のヒンドゥー教寺院であって、アーザル・カイヴァーン廟そのものの遺跡ではない。ここに「アーザル・カイヴァーン学派の精神的空間」を感じ取ったチャハールデヒー氏の見解は、正されるべきだと思われる。

### 参考文献表

ペルシア語

Ahmad, Syed Shah Haseen 2001: *Tasauwuf Ahad ba Ahad*, Patna.

—2012: *Heyāt-e Shaikh ul Islām*, Patna.

Chahārdehī, Mas'ūd Rezā Modarresī 2012: "Noskhe-ye Khatī-ye Dīvān-e Mōbed Kelīd-e Peyda'ī-ye Nevisande-ye Dabestān al-Mazāheb va Peyda'ī-ye Mazār-e Āzar Kayvān", *Mehr va Nāhid: Pazhūhesh-e Īrān Shenāsī*, pp. 73-79.

—2012-13: *Nāme Jām-e Kay Khosrow Sharh-e Mokāshefāt-e Āzar Kayvān bar Asās-e Noskhe-Khatī az Khodājūy ibn Nāmdār va Resāle-ye Me'rājīye va Movā'ez dar Sharh-e Me'rāj Rūhānī va Jesmānī va Enslākh-e Rūhī az Hakīm 'Abbās Kayvān Qazvīnī*, New Delhi: Alpha Art.

Chahārdehī, Nūr al-Dīn Modarresī 1393 AH (=2015 CE) : "Sharh-e Hāl-e Hakīm 'Abbās Kayvān Qazvīnī," <http://razdar.com/1393-06-11-20-42-14>.

Khanquah Hazrat Diwan Shah Arzani, *Quarterly Deewan Patna*, Vol. 11, 2015.

Qazvīnī, Hakīm 'Abbās Kayvān 1388 AH (=2009-10 CE) : *Ketāb-e 'Erfān Nāme: Asr-e Hakīm 'Abbās Kayvān Qazvīnī bā Moqaddame-ye Rashīd Yāsemī va Nūr al-Dīn Modarresī Chahārdehī*, Tehrān: Nashr-e Āfarīnash.

英語

Ahmad, Qeyamuddin 1988a: *Patna through the Ages*, Patna.

—, 1988b: "ĀZĪMĀBĀD," *Encyclopaedia Iranica* (電子版、

2018年7月1日 閲覧) <http://www.iranicaonline.org/articles/azimabad-patna-ancient-pataliputra-present-capital-of-bihar-state-in-northeast-india>.

Allen, Charles 2003: *The Buddha and the Sahibs*, London: John Murray Publishers Ltd.

Chatterjee, Kumkum 1996: *Merchants, Politics, and Society in Early Modern India: Bihar, 1733-1820*, Leiden.

Goshtāsb, Farzāneh 2018 (forthcoming) : "Mīrāth-e Gomshode-ye Āzar Kayvān".

Gupta, Raman 1998: *Patna: A Journey through the Ages*, Patna —2009: *The Contribution of Muslims to the Developments of Patna 1540-1947*, Patna.

Munemia 2015: *An Introduction to Khanqah Munemia: Abode of Spirituality and Harmony*, Patna.

Rizvi, Sajjad H. 2011: "Hikma muta'aliya in Qajar Iran: Locating the Life and Work of Mulla Hadi Sabzawari (d. 1289/1873)", *Iranian Studies*, 44:4, pp. 473-496.

Sing, Vipul 2005: *The Artisans in 18th Century Eastern India, a History of Survival*, New Delhi.

日本語

青木 健 2015a: 「アーザル・カイヴァーン学派研究—*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht*の写本蒐集と翻訳校訂—」, 『東京大学東洋文化研究所紀要』(第167冊), pp. 348 (157) - 302 (203).

—2015b 「アーザル・カイヴァーン学派研究2—*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht*の写本蒐集と翻訳校訂—」, 『東京大学東洋文化研究所紀要』(第168冊), pp. 147 (174) - 77 (244).

—2016年 「アーザル・カイヴァーン学派研究3—ポスト・モンゴル期のイスラーム思想史に於けるアーザル・カイヴァーン学派—」, 『東京大学東洋文化研究所紀要』(第169冊), pp. 184 (379) - 97 (466).

—2017年 「アーザル・カイヴァーン学派研究4—*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht*の写本蒐集と翻訳校訂—」, 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』(第48号), pp. 9-31.

—2018年 「アーザル・カイヴァーン学派研究5—*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht*の写本蒐集と翻訳校訂—」, 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』(第49号), pp. 1-19.

### (Endnotes)

<sup>1</sup> 筆者はこの情報を、2014年9月にボン大学で開かれたアーザル・カイヴァーン学派研究会の際に聞き、2015年9月にボン大学研究員の Mohammad Karīmī Zanjānī Asl氏からその現物を入手した。お送り下さったZanjānī Asl氏には、感謝申し上げたい。

<sup>2</sup> チャハールデヒー氏はこの名前をペルシア語で「ジャクリー地区 (Jaklī) 」と綴っているが、地元住民によれば「ジャイトゥリー地区 (Jaytulī) 」が正しいとのことである。

<sup>3</sup> チャハールデヒー氏はこの名前を「ラティーク・アル・ハック」と綴っているが、本人によれば「ライク・アル・ハック」が正しいとのことである。

本稿は、科学研究費補助金基盤研究C「16-17世紀に書写された古代イラン文献の文献学的研究」(研究課題/領域番号15K02054, 研究代表者: 青木 健)の成果の一部である。

